DOQSEI 2 C

betsu no otoko.
bonaji mokuteki.
chigau machi.
chigau kisetsu.
sore wa dōkyūsei.
arui wa yukizurino hito.
kazoku kamoshirenai.
kare wa junsuina kokoro o mochi.
sonoue sugoi vitality.
kizutsuita kokoro to tomoni.
midarana kokoro to tomoni.
kare no kokuhaku wa anata no unmei o kaeru.
kare no sentaku wa anatani hametsu o motarasu.
kare no kōdō wa anata no ganbō o abakidasu.

Ver 1.0

同級生 2

D-2



tonari no heya.
tonari no ie.
tonari no machi.
kimi wa imōto o mamoranakereba naranai.
kimi wa kanojo no kutsū ni kizukanba naranai.
kimi wa kazoku o nagusamenakereba naranai.
kimi wa kikai o ikasaneba naranai.
kimi wa mokuteki o togenakereba naranai.
kimi no nozomi o kanaeyo.
sore ga dekiruno wa kimi dakeda.
kimi wa son'na koto wa shinaihazuda.
sentaku wa kimino jiyūda.
dakara sōshitanoda.
kore ga bokura no sentakuda.
kanojo no kuchibiru wa itsumo emi o ukabe.
kanojo no memoto wa itsumo suzuyakade.
kanojo no tatazumai wa itsumo seisode.
bokura wa kōsurushika nakattanda.
bokura wa hontō ni kōsurushika nakattanda.

COMPOSITI

MARUMIYA

DOQSEI 2
Ver.1.0

d-2

CONPOSITE

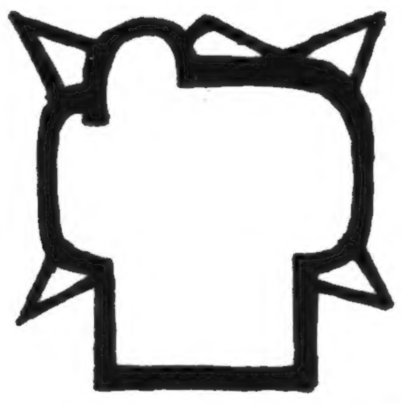
同級生2



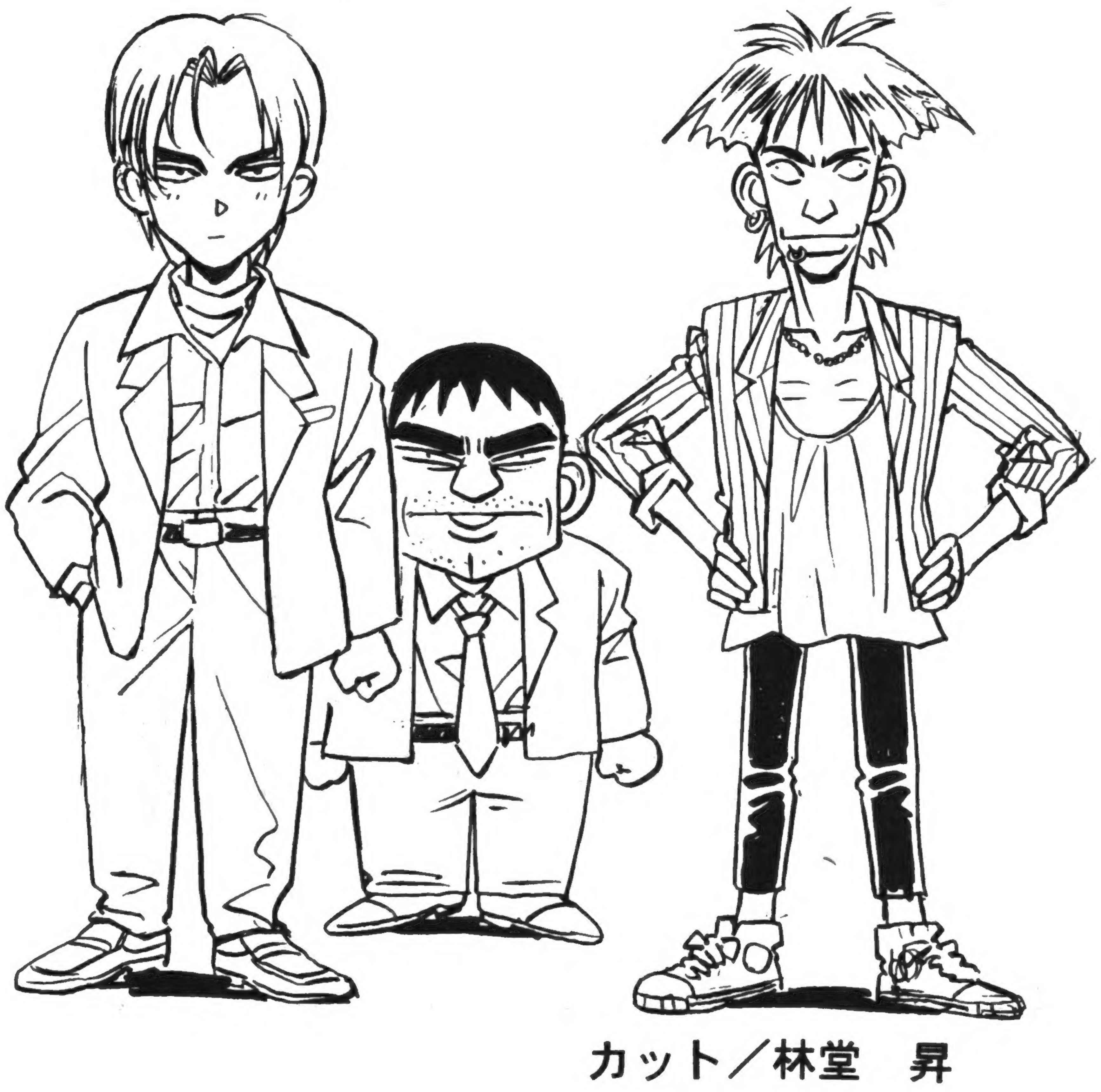
丸……………美……………屋……………本……………舗



おしながき



↑御自由にお使い下さい



カット／林堂　昇



同級生２な男たち

林堂　昇




こうしている間にも我が愛しの唯さんがりゅうのすけと一つ屋根の下で暮らしていると思うと・・・・
おにーちゃん ゆいだよー
ホエホエ
僕のナイーブな心は引き裂かれんばかりだ！
はあぁぁあっ
そんな事より今は奴を陥れる作戦を考えるべきでは
策はあるのか？
フッフッフッ もちろんだ
りゅうのすけの奴が寝入った頃美佐子さんに変装した俺がこっそり奴のベッドに忍び込んで——
りゅ〜のすけくぅ〜ん♡
すぐにバレそーな変装はよせっちゅーに！
え———ッ？
ガッ
グシャ


うーむ
何かりゅうのすけの弱味が見つけ出せればいいのだが
ハァハァ
ちっ
そんな物があったら苦労しないぜ
昨日学校でりゅうのすけ君が落とした日記をひろったんだけど・・・・・・
フムフム……
1月7日
AM12時……
?
何じゃこりゃ？…
りゅうのすけの日記だとォ？
それだ！
奴の秘密をあばくのにはもってこいだ！
うぉぉおっ
・・・・・・・・・・・・・
1月7日八十八学園校門
なんだァー？ 新学期早々真っ白になってる奴らがいるぞ……
そんな事より早く教室に行こうよお兄ちゃん

おわり♡


同級生2のこと
たいでんたくん
1995.
こいづくんは同級生2はやったかね!!
いえ……まだっす。
だーめじゃないかぜったいいいからやるんだ!!はまるぞ〜っ
幡池さんのほんにもかくんだーっ!!
し…しかし今うちの98つかえないんですよ。
お盆進行だし…
うーすもってきたぞ
スピーカー付き
98ノート
うーむ
進行がなあ…
ピッピッ
98ノート
キーンコーン
カーン
はっ!!
これは
おはよー
コーン
うーっす
カン
おはよう
なんか久しぶりに感じるこの感覚…
「学生時代…」
このゲームいいかも…
じわ〜っ
うっ!?
そおだ!!
インサイドしやすいワシ…
じわ〜っとしとる場合ではないっ!!
今の世の中お盆進行中なのだ!!
つづく!!…かな

割れた花瓶
公園の木漏れ日
おもい上がった嘘


気遣ってくれた
たすけてくれた
いさめてくれた

仮面（ペルソナ）は砕け
自尊心（プライド）は損なわれ
でももう、偽りは要らない

いまかんじるのは本当の心
いま装いたいのは本当の私
いま言いたいのは本当の気持ち




同級生2
「桜子ちゃんがんばって」の巻
あ、
こんにちわ リュウのすけくん…
よォ
桜子ちゃん好きだ!
わたしもよ リュウのすけくん


あ！
体の方は大丈夫かい？
むりすると…
うん平気…
ああああああ
体、大丈夫？
うん！平気!!
それじゃもーいっちょ
あああああ
さ、さくらこちゃん…か、体の方は…
もりっ
ぜんっ
ぜんっ
へーきィっ
ちょっ…まっ…あ～さくらこちゃ～～…
あっあぁあぁあっあぁ
カオーーっ
かっからっ…
ガワッ
桜子ちゃーん
ごぼっ
りゅーのすけくん…
今、いく…
本当は、桜子ちゃんが、木を登っていくところまで描けば、ちゃんとオチたのにね… 時間切れ、すいませんでした

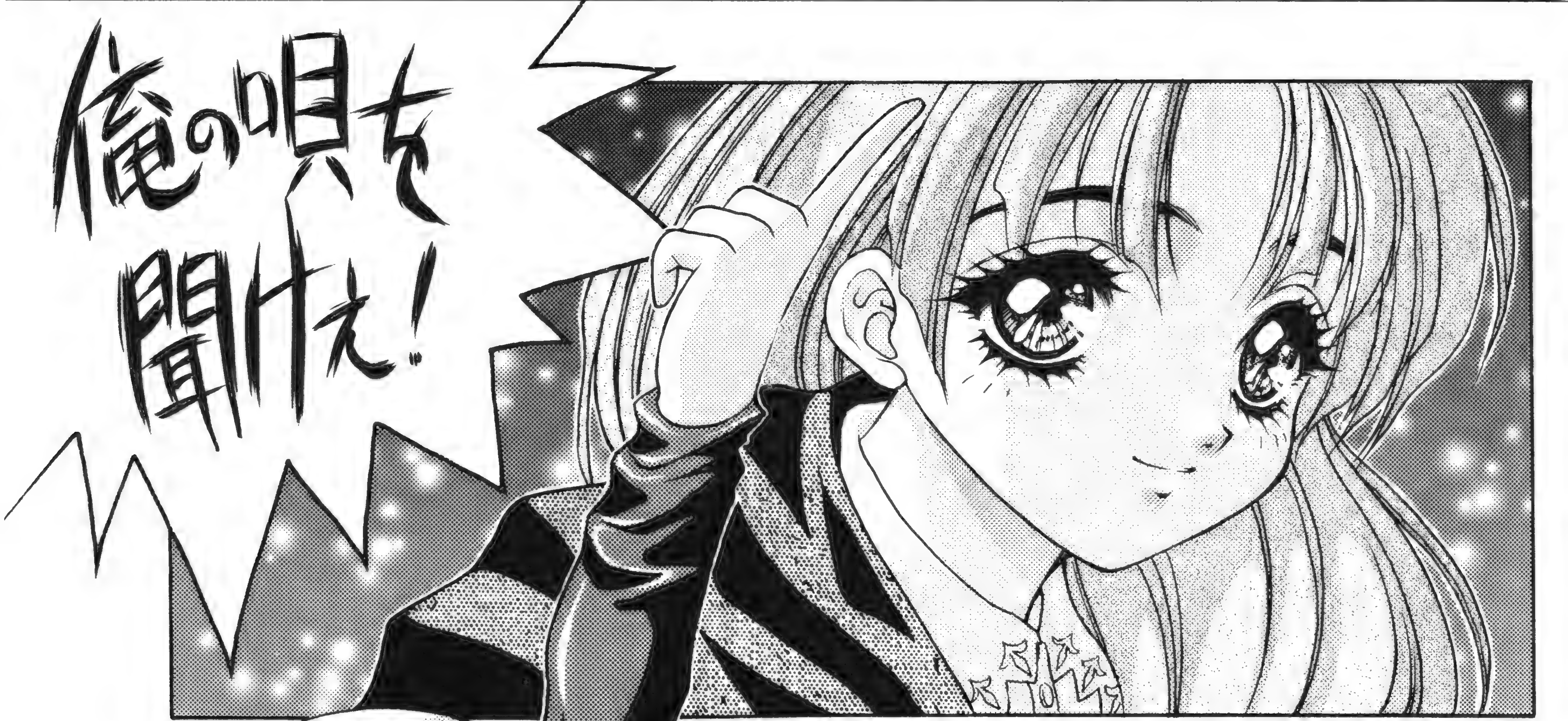

やっぱり大人の
女
だよな!!
たじま
かつひこ



同級生2だって言ってんのにィ
お…おはよう りゅうのすけくんっ♡
ドキドキ♡
うわあっ美佐子さあん
私は美佐子にラブラブフラァーッシュ！
なんて格好してんだよっ
うぉーキャー
折角りゅうのすけくんがプレゼントしてくれたからうれしくて着てみたのよ。
だからってみさこォ〜
ゆ…唯が居るんだから
…あら
りゅーちゃーーん もえる〜
イヤー！
本命
「プレイしながら泣いちゃったんです 本当にパソコン買おうかな いやマジで。でも本命はりゅーちゃんだったりして」のまき。
つちやきょーこ。



※りゅうちゃんなら何見ても濡れるうちのみさこさん。





▲KAREN.　▲SAKRAKO

同級生
D-2について.


◪ こんにちわ. 街角のバーチャファイター、FJ-Ⅲです.一部では“ときメモ„マスターとして有名な(どこでじゃ) 自分ですが今回はD-2についてコメントしますね。はっきり言って面白いです。D-2は。システムやバランス面にはまだ改善の余地がありますが、その辺の不満を吹き飛ばす位 シナリオが良いです。まさか“18禁„ゲームで泣けるとは思わなかった。…そんな事はこの本を買った人ならわかってるよね。

◪ 話は変るけど何人かのキャラのメインテーマをふと考えてみました。唯は“サボテンの花„(財津和夫)か“ONLY YOU„(BOΦWY)„ 知美は“OH MY LITTLE GIRL„(オザキ) 主人公は“突撃ラヴハート„(まんまやな)……なんてね。実は自分の得意のカラオケナンバーなだけなんだけど、ちょっと思い浮かべつつプレイすると けっこー泣けるかも?(他のキャラも考えよう)

◪ さてゲームのシステム上 複数の女のコを同時攻略できるけど個人的には否定したい。なまじなコトをやってしまった自分はその.複数のエンディングを見るため唯や知美や桜子の告白をふったが為 血涙が出るかと思いましたよ. マジで。従って未プレイの方は 一人の女の子とじっくり付き合う事を勧めます。個人的に告白の後 返事を強要しない可憐に好感度+1の. FJ-Ⅲでした。

1995. 7.28.


泣かせるシナリオの後の超ドUP攻撃。
デイスプレイの中の絵のはずなのに
ドキドキものだ。時に唯は最も深く
主人公を愛してるだけに超強烈…。
もはやサブリミナルを超える凶悪。
◎ ONLY YOU…
YUI NARUSAWA.
唯はある意味男にとって理想の女のコの様だが実は違う。
彼女の"想い"はとてつもなく"重い"のだ。彼女の人生全てを
背負える度量が無ければ彼女を愛する資格は無いと
自分は思うのだがどうだろう?
F-J-III 1995.



やっぱ涙は女の最終兵器
だよな…。分裂症気味に街中を
さまよう彼女をつかまえるのは
ゲーム中でも屈指の難しさだ。しかし、
苦労の後には至福の時が待っている。
© OH MY LITTLE GIRL…
TOMOMI MIZUNO.
成績優秀で容姿端麗な彼女。それは全て
主人公に認めてもらうため努力した結果だ。唯とは
全く違うアプローチだけど彼女の芯の強さが
うかがえて好感がもてる。もしお互いを認め
あえれば人生の最良のパートナーになれる
可能性のあるキャラクターだと思う。
1995.

唯ちゃんの予感



私ねーっ
お兄ちゃんと
つきあう
自信ないんだ…
唯!?
ぬ゛ぬ゛
ぬあにい
〜〜っ!!
あっ
さては
西御寺と
うまくやってん
じゃ……
そんな事は
絶対に
ゆるさん!!
1995.8

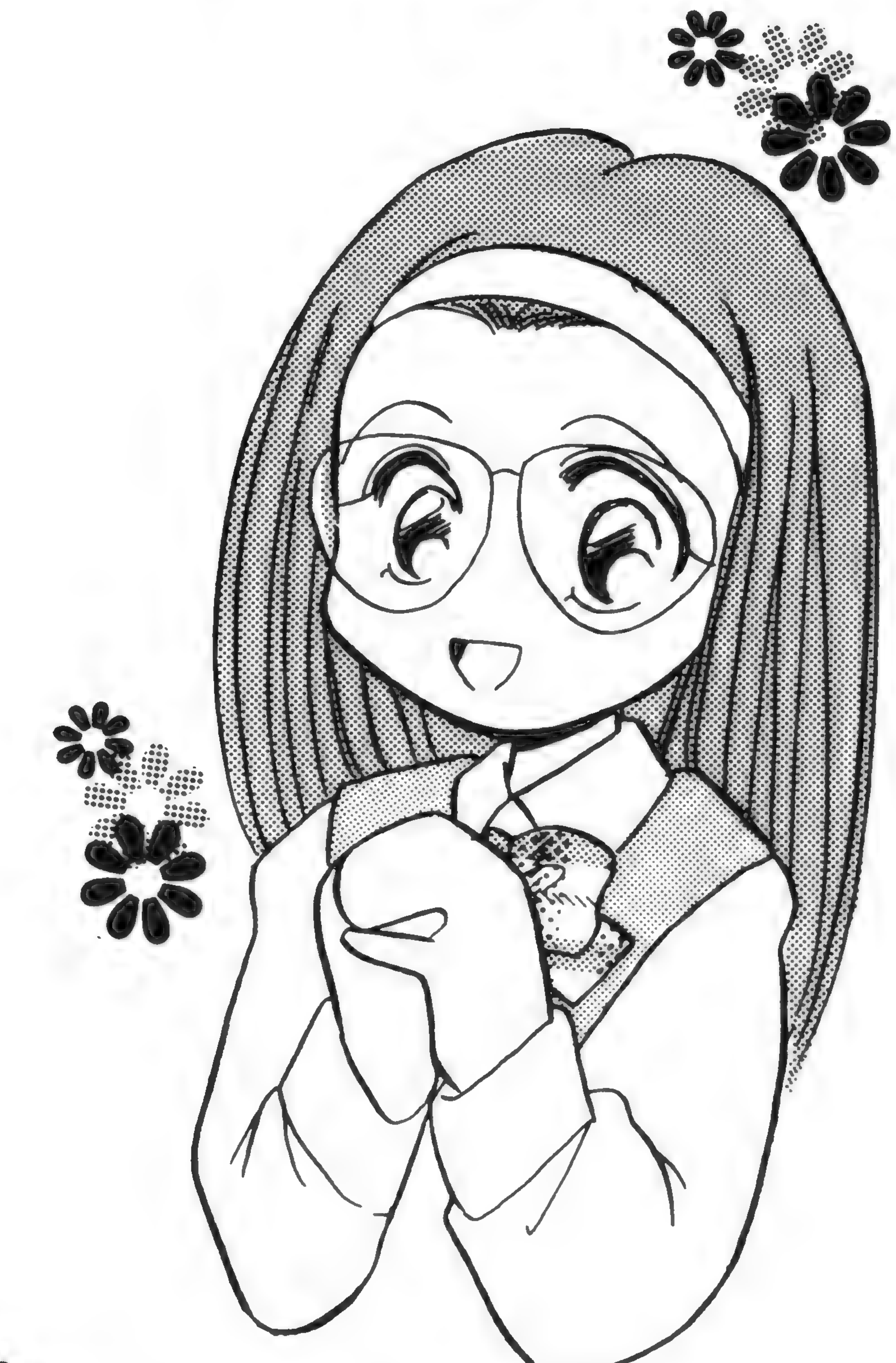

んあっ
ダメダメ お兄ちゃん だめぇーっ
オレは 最初から 唯だけを ターゲットして たんだぞぞぞ
あん！ ーっあぁ
なーんて事 考えてるん じゃぁないで しょーねェ…
お兄ちゃん！
ギクッ

友美ちゃんSOS



女の子がやるとそう思う…ハズ。

がんばれ！
友美ちゃん！

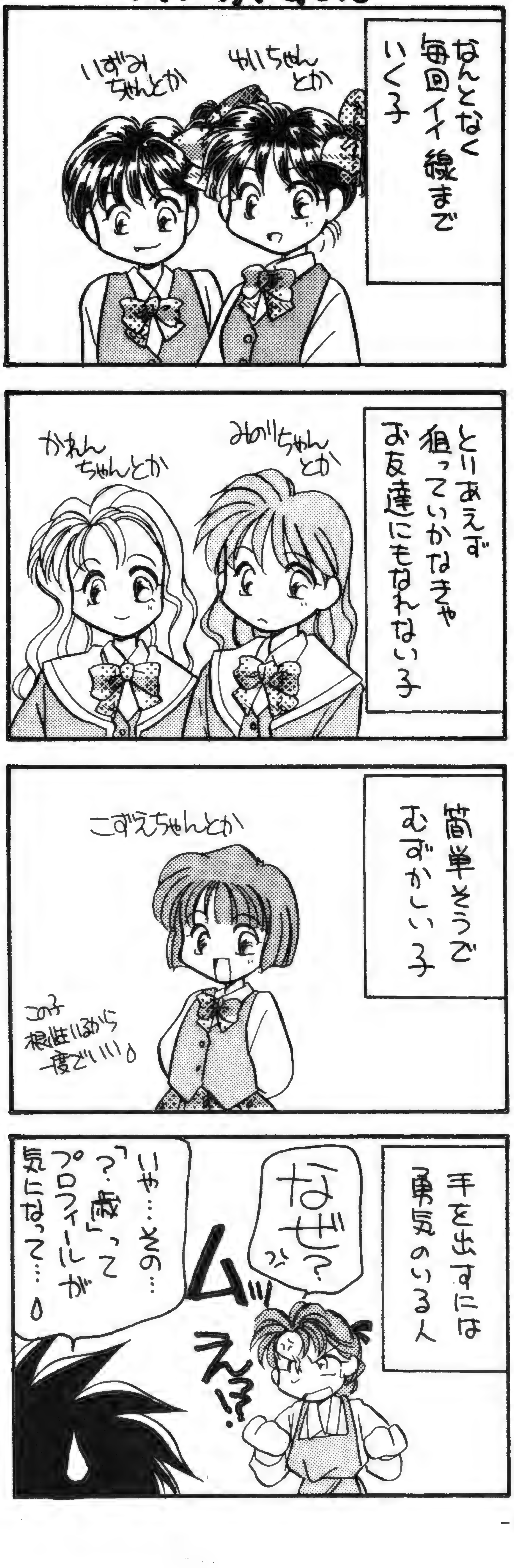


by おさるポリ太
& ポリ子

友美のなやみ



タイプ別女の子




どーするどーなる
同級生
ひさびさに一日中モニター釘付け状態でヤリまくった「同級生2」
きっと続編や新作もつくられるだろう
「同級生S」とか……
ホホホッおしおきヨ！
Sってスーパーズじゃないんですか
麻雀ゲームの要素を入れたり
格闘ゲームにしてもいいかも
格闘屋でちゅ！
怒りのリーチ
だけど「同級生M」だけは
僕の肉奴隷だヨ
やめろ！
これならノーヘルで乗っても大丈夫
ドッドッドッ
ドドッドドッドドッ
OHYAN
ほえほえ〜


同級生2の攻略のツボを教えてあげる
うざってーの
基本は女の子にかける事よ
へっへっへっそーいうのは得意だぜ!
コキコキ…
ばちーん
そーじゃなくって!
声をかけるとか上着をかけるとかあるでしょ
コエねエ……
なんかチョー不安……
ダッ
よぉうーしッ!
へーイ彼女〜〜ッ
でででででで
どーん
びちゃっ
プ〜ン
何〜ッこれ……?
ご、ごめーん
あ…あの……
LOVE LOVE
アソコで洗いましょう
みしっ
いーかげんにしろ!
中までキレイにしなくちゃ!オイラの棒タワシで……

どおきうせい2
竹井画伯サクセス笑すごろくだ!




あがり
祝
同級生2 100万本達成
ふふ 若い娘は良いのう
富と名声と女を手に入れる!
CHU!
同級生2のキャラ
でもこれは
5コマ戻る
トップとビリ入れかえ
同級生ヒット 竹井旋風吹き荒れる!! 3コマすすむ
都会には空がない…
東京進出
再びサイコロもいっかいふる
うおーっ
仕事の取り過ぎ 2回休み
2コマ進む
全員5コマ戻る
〆切前ダウン 1回休み
だれかを15コマ戻せる
東海大地震 御殿ほーかい ふりだしに戻る
くうーっ
ボクはいるからうらやましくないよ
本当か?
こちら
ボク女の子に興味ないから
そそらないもん
モーホー?
ぴたりと数が合うまで あまった分戻りませう!
ここが運命の別れ道!
もや
もや
ドキドキ
同級生2ついに発売
ウヒョ ウヒョ
富士屋の弁当食べ過ぎる 8コマ戻る
もう少し
1回休み あわてるな
こちら

私立探偵、みのりの、事件簿
ファイル1

八十八高校殺人事件

本当は、このネタで２０ページぐらいマンガ描きたかつたが、
いくらなんでも、僭越なので・・・でも、ドンドンイメージわいて、
しょうがないので、キャラ紹介だけ描いた・・・・・
どう・・？おもしろそう・・・？？

BY.ゴミ.






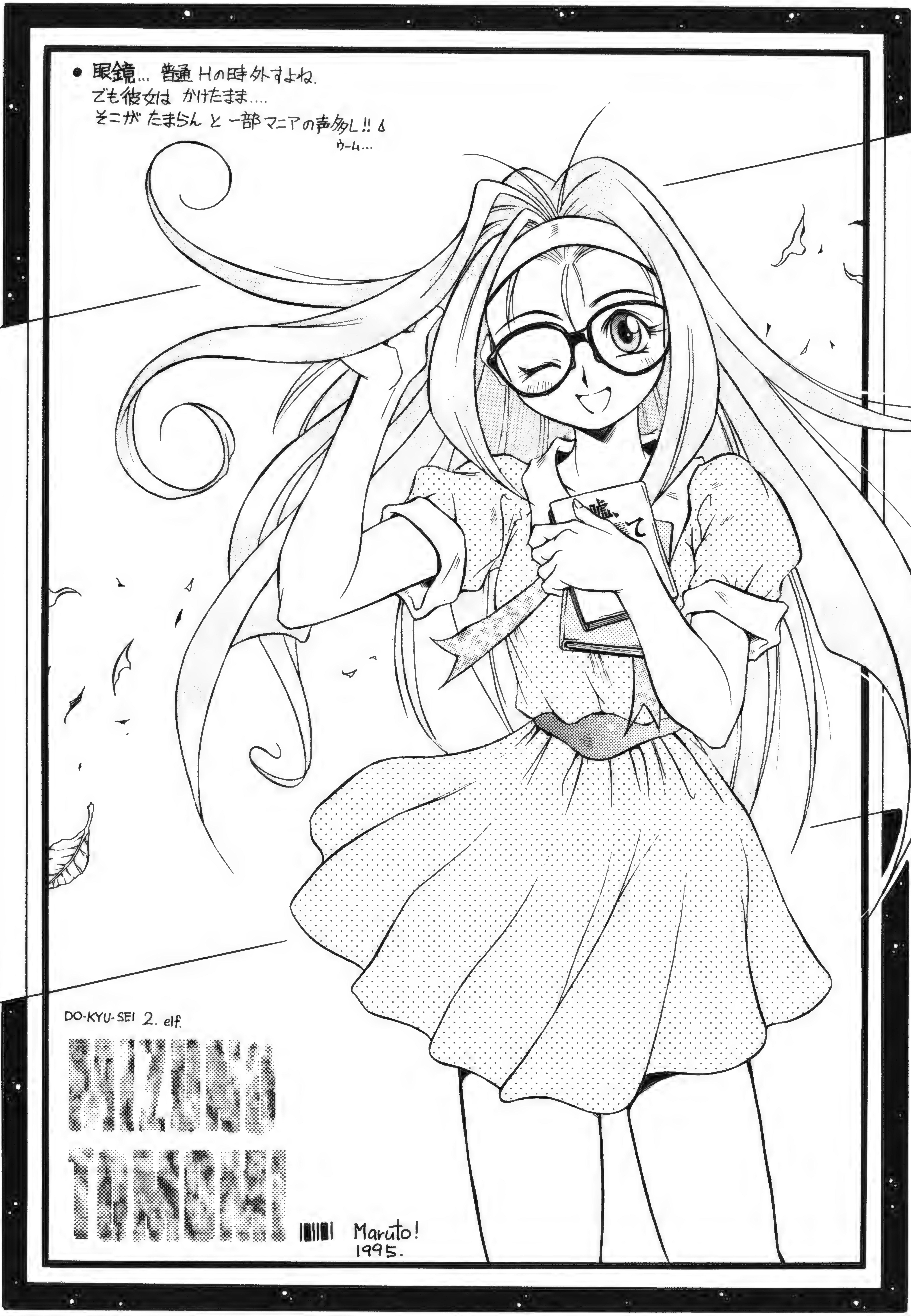




どう…？このCV。これでバッチリだ


――― デスサイズ―――
さっちゃん
同級生2で、一番好きなキャラなので、パソコン持ってなくて、プレイしてない人の為ん、どんなキャラか、おしえてあげるマンガだよ！
最近またバカマンガばっか描いてるゾ
ガチン
ガチン
小山雲雀鶴
彼女は大変体が弱く
ゴホ
ゴホ
とても病弱ですな
うげえ
優しい彼女は小鳥を飼っています
なぜか急にいなくなってしまいましたな…
バリボリ
ゲピー
バリボリ


しかもかわいそうな桜子ちゃんは、一度、死んで、しまうのです……
食中毒で…
たった一つの命を捨てて生まれ変わった不死身の体……
鉄の悪魔をたたいて砕いたり…
ほーっほほほほほ!!
……波のりをしたり
ゴオーーーッ
学校にしのび込んだり…
ピッ
見つけたゾ!!
ちっ
殺せーっ
……
民家(鉄の家)にしのび込んだり…
とりだり……
けっこうスキだぁーっ
桜子君のそんなトコが
おわり

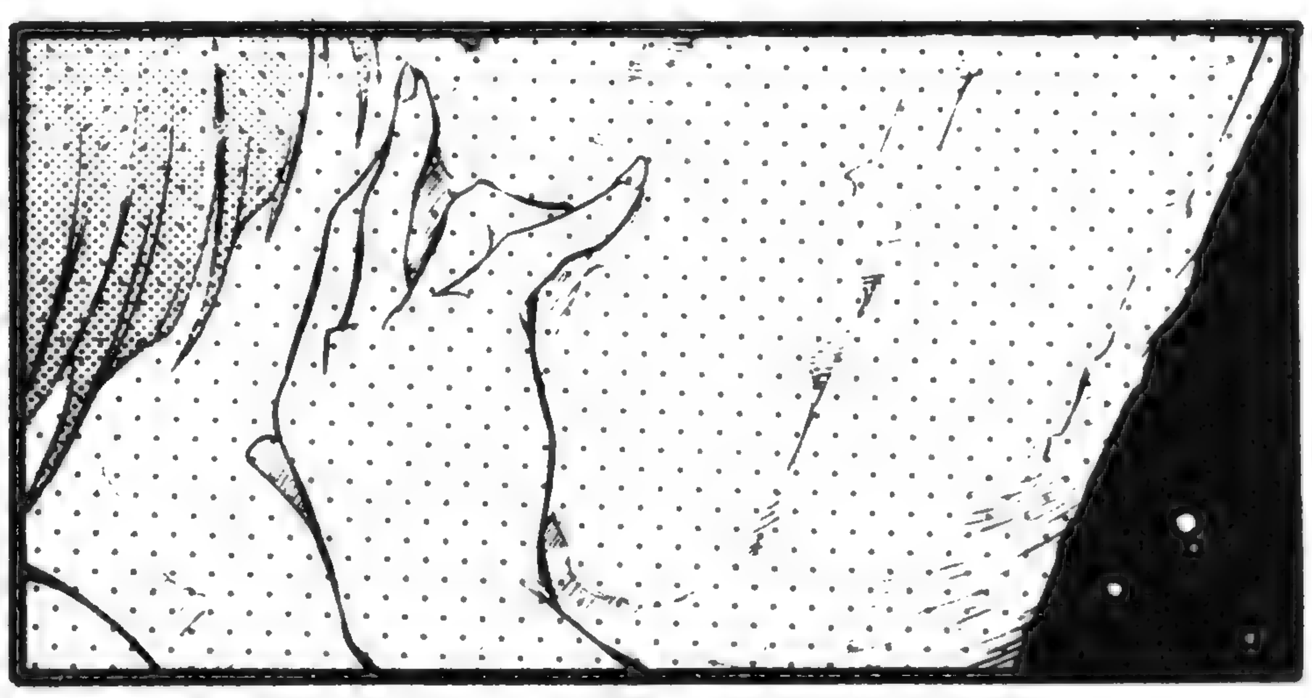

● 眼鏡… 普通 Hの時外すよね.
でも彼女は かけたまま….
そこが たまらん と 一部マニアの声多し!!
ウーム…
DO-KYU-SEI 2. elf.
Maruto!
1995.

KUROKAWA SATOMI

DO-KYU-SEI



SATOMI jyoudesu. Sikasi nin
ai... Kigatuyokute namidamor
oi,sikamo H wa Kouen da! uoo
! Moeru!! Kouen de surunoni
zenbu nugasite Maruhadaka ni
surunomo sugoikedo...
Kanojyo wa 1no Kyara dakedo
2wa mitari kiitari teido no
Jyouhouryou sika naidesu. uo




o! X68 nimo dasitekurei!!
Sono 2 desuga 1 no tokino m
asani SEX RUSH! tena kanzi d
ewa naimitaide... soremo nan
daka kanasii-.



Maruto!


MIREI♡


IZUMI & TOMOMI ♡


友美の胃大腸反射！
大作戦
えっ？
え〜？


ダメ！おしりは……っ
スッキリしたかヨオオおおお?!
下血…っ
おげれつ！
K2


どうだい ぼくの
肉人形・・・

特別緊急討論会

カット／武半慎吾



編集長「い…いかん、最後の編集段階で2ページ足りない事が発覚してしまった！」
編集A「そんな時でも我々は少しも慌てず……」
編集長「同級生討論会をして埋めるのだ」
進行B「埋める？」
編集A「じゃ芳樹を埋めろ！」
進行B「ニナ＝パープルトン！」
進行C「中村○文画伯！」
進行B「あ、危ない発言」
編集A「フッ。伏せ字にしてれば恐いモノなぞない！」
編集長「いいか当然予想はされていたことだが、あの人が億に一つ原稿描いてたらこのPはなかった」
進行C「お、俺にも絵を描かせろー！（絶叫）」
編集長「フン、なにぃ？　その態度は何だ！」
進行C「だってまだリ○ーナイトの作業が残ってる！　描けない、けど描きたい！」
編集長「何だとォ？　元はと言えばお前が中村画伯からキチンと原稿を回収してこなかったのがいけないんじゃないか！」
進行C「世間は今『お盆進行』の真っ最中だから大変だった。逃げられたの！」
編集長「そんなモノは、普段からキチンと仕事を上げていれば何でもないわ！」
進行B「そんなセリフ、このヒトが言ったって『説得力』ないよなー……」
編集長「フン、えらそーにいうまえに、埋めろここを！」
進行A「あ、誰か来たみたい」
編集長「話を変えるな！」
進行B「いや、本当に誰か来てるよ」
編集長「まったく……はーい、だーれー？」
旅人「ちわーっす、通りすがりの旅人でーっす」
進行C「おや林堂先生。どうしたの？」
旅人「くっくっくっ………『林堂』じゃなくて『旅人』と呼んでくれたまえよ」
進行B「『芳樹』みたいな喋り方するなッ！　埋めるぞ！」
旅人「きっついなー、僕達は友達だろー」
編集長「埋めろ埋めろ！　誰かソイツが二度と出てこれない様に埋めてしまえ！」

（続きは38ページへ）


Hiroyuki
Hataike

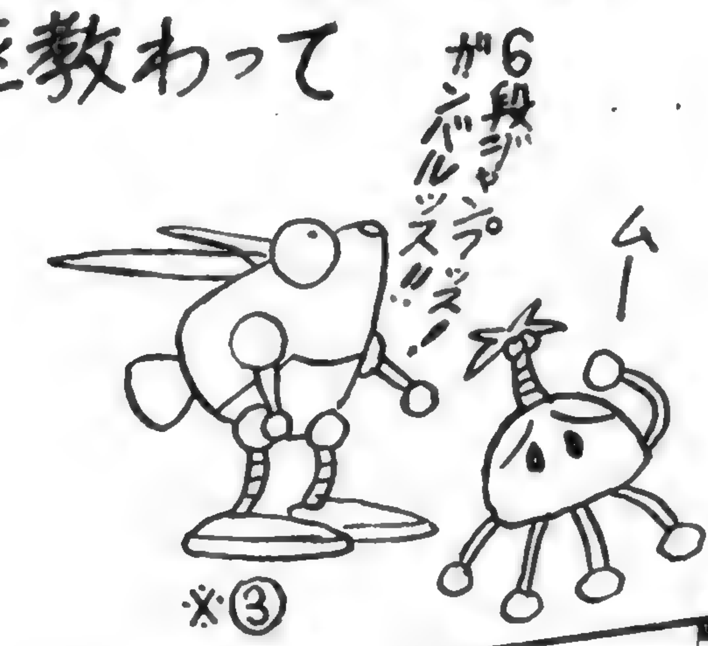
俺もやったぞ 同級生2！♨

林堂 昇.





7月某日、伊東老師の命※①により「同級生2」なるゲームをやる事になった。あまりパソコンゲームの類に縁の無い俺は簡単に操作法を教わって早速挑戦してみたのだが、これが実に**面白い！**
竹井先生のキャラクターによるゲームは以前「卒業」を1度だけやって以来なのだが、今回の「同級生2」には更なる業の深さが感じられた。色モノキャラ※②も実に良い!!
今現在「飛びゲー」※③と共にハマっている数少ないゲームのひとつである!!!





旅人「スマン、俺が悪かった！　本当は俺も芳樹は大嫌いなんだ。ただチョッと寝不足でハイになってただけなんだよー」

進行A「あれ、そういえば進行Cはドコ行ったの？」

編集A「あ……いつの間にか隣の部屋で仕事してる」

編集長「てめ！　今そんな事してる暇はないだろうが！　あと5時間以内に終わらせないと、この本落ちちゃうんだぞ！」

進行C「じゃ、描くよ。そのかわりコッチ描いてよ」

進行B「ひらきなおりか」

編集A「チッ！俺だってこの同人誌のために、今日は会社を休んで……あ、いや何でもありません」

進行C「そんな事言ったって、商業誌の原稿落として来月から仕事が無くなったらどーする？」

進行A「そ、それは困る！　そんなことになったら、私はゴハンをゴチソウしてもらえなくなってしまう」

進行B「それは俺もすっげー困るなぁ。仕方ない……編集長、旅人が遊びに来てくれたコトだし、ここは一つ進行Cを開放してやってもいいんじゃない」

編集長「えーい、ウルサイウルサイ！　俺に指図するんじゃない！　……しかしコレの仕事がなくなったらマジで可哀想だから開放してやるか」

編集A「では真面目な討論に……次回の『同級生3（仮）』でやってほしいネタを一つずつ」

編集長「『マヌカン』『バスガイド』と来たから、今度は『スチュワーデス』！」

進行A「私は、波○拳とか六段ジャンプができる……」

全員「それは絶対違うぞ！」

進行B「『上級生』はコレに入ってるし『下級生』はゲームにあるから……『新入生』ってのがいいな」

旅人「俺は『聖職者』をもっとてごめにしたい（笑）」

編集A「なるほど、『婦警』や『公務員』も含む。だな？　よし。埋まった埋まった。ではこの辺で終わりましょう」

全員「チャンチャン！」



カット／武半慎吾



丸美屋の同人誌に首ったけ!!
カシャ
●新作「上級生」はいったいどんな小説でしょう？
皆誰でも経験する、インサイドしてしまったゲーム世界やキャラへの強烈な思い込みとやるせなさ。
そんな思いを行間にぎゅっと詰め込んでみました。
あの夏休みから一年後。あなたのなじみのキャラクターは一人だけ。そして、7の倍の選択肢から、
彼が選んだのはいわゆる一般的な選択だった場合の後日談です。
話は簡単、あなたが「同級生」をプレイしたことがあって、最後の日に、おそらくは、仲よしの娘と憧れの娘のあいだで揺れ動いたことがあるなら、これはもう共感天国！
もーうこれはすっごい小説です！
某ビジュアルマガジン副編集長
鮮烈なる小説デビュー!!
上級生
PARでもIMPでもADMでもないインスパイアされたストーリーとはこういうものだ全く新しいタイプのゲーム
短編小説
『上級生～PHOTOGENIC SUMMER』
AUTHOR 菅沼拓三
TAKUZOU SUGANUMA
ILLUSTRATER 近藤敏信
TOSHINOBU KONDOH
MARUMIYA VERY FAVORITE series
d² oqsei

1

「じゃ、始めようか？」

　使い込んだペンタの一眼を手に取って、新しいシーツをかけたベッドにちょこんと腰をおろした女の子に声をかける。彼女は同じ写真部の二年生。フィールド・ワークに一緒に行ったりしているうちに……○×という間柄。今日のファッションは涼しげなサマー・ジャケットにキュロットという組み合せ、フィールド・ワークの時はもうちょっとヘヴィ・デューティなイメージだから新鮮だ。

　彼女はちょっと強がるように肩をすくめてみせた。

「あいかわらずね」

「何が？」

「カメラを持つとハイになる」

「まかせてくれ」

　俺は手にしたペンタを彼女に向かって突き出した。

「自信はある。きみを死ぬほどホットに撮ってやる」

　彼女はうつむいたまま小さくうなづいた。

「俺は俺を信じてる。きみは俺を信じてくれ」

　もう一度うなづいて、彼女はサマー・ジャケットを肩からぬいた。

　午前8時。まだ、光の状態はベストではないが、東の窓から入る光の角度はテストショットには最適だ。赤みを帯びた光の中で、彼女の白いシャツが、アンダーウェアが、陽の光を浴びることのない白い、白い肌が、なまめかしく染まる。

　色温度補正は？　いらない。そんなことをしなくてもコントラストは大丈夫……そうか？　えい、テストショットだ。自然光相手に注文は不可能。まずは、モデルの緊張を解きほぐし、自然な表情を引き出すこと。

「ちょっとベッドから出てみ。シーツ？　ああ、巻いたままでいいよ。そこに石膏像があるだろ？　兄貴の忘れ物なんだけどさ」

　白と白？　もう少しバランスが欲しいところだが……おっと、1ロール目終了。

「シーツ取れる？　いや、無理しなくていいけどさ。うん、床にうつぶせになってみて。冷たくて気持ちいいだろ？　おいおい、ちゃんと掃除したぜ……そう、光の境界線のあたり」

　フローリングの茶に、細身の下半身。日焼けした下肢は、上にいくほど白くなって。

　すこしづつ暑くなり始めた部屋の中で、俺と彼女は肌に汗をにじませながらフィルムを感光させていった……

　そのときの気分は最高だった。彼女に言ったのは嘘じゃない。自信だけは、売るほど持っていた。あの夏休み最初の一日は、そうしての始まったんだ。

　10の10倍、100分後。

　テストショットに使った3ロール分のフィルムを前にして、俺はひたすら焦っていた。

　10時から11時の間、天窓から入る光がベストになる。その時間帯を本番と決めてあった。あと10分ほどだ。

　しかし……

　俺の頭の中には、本番用のショットイメージが、なにひとつ浮かんでこなかった！　なにひとつ！

　こんなことははじめてだった。被写体があって、撮影条件がインプットされれば、俺のまぶたの裏には可能なショット、ベストなショットがめくるめく早さで映し出されていく……筈なのだ。

　最初はなにがどうなっているのかわからなかった。じりじりと焦げ付くような想いを抱えて、一生懸命原因を考えた。考えて、考えて、考えて……

　思い当たることはたったひとつだけあった。原因はほぼこれに間違いはない。おめでとう。原因がわかれば解決策もある。道は拓かれた。

　しかし……その道が常に広くて平坦な道だとは限らない。おうおうにして茨の道だったりする。今回もそれだった。

　本番開始まであと5分。俺は追い詰められていた。

　シーツを体にきっちり巻き付けて、床にあぐらをかいた俺をベッドの上から見おろす彼女の顔に怪訝そうな表情が浮かぶ。そりゃそうだろう。もうかれこれ30分、俺は一言も発していないのだ。

「どうしたの？」

「……」

「なんか前にもこういうことあったね」

「そうか？」

「ほら……」

　彼女はいたずらっぽく笑った。

上　級　生

「お酒の飲みすぎでカタくならなかったとき」
……鋭い。鋭すぎる。女ってやつは時として妙に鋭い。
「あ、ゴメン」
彼女は俺の前にしゃがみこんで頭をナデナデしてくれやがった。
「もう言わない。忘れよう」
その彼女の優しさが、俺には耐えられなかった。
「……やめよう」
「何？」
「撮影、やめよう」
「……？？？　えーと？」
「服を着てくれ」
彼女はちょっと身を引いて、難しい顔で腕組みをした。
「……『学園祭で最高にホットなヌード写真をゲリラ展示したい。きみがモデルになってくれれば最高の写真が撮れると思う』って言ってきたのは……中間テストのころだっけ？」
「だな。断られても断られても、毎日毎日頼み続けた」
「そりゃ断るわよ。顔も出すんでしょ？」
「じゃなきゃ意味がない。投稿誌にあるみたいな貧乏ったらしいやつを撮りたいわけじゃない。『きれいな私を残しておきたい』なんて動機の気のぬけたポートレートでもない。最高にホットで強烈なパンチがあって、見たオトコ全てを発情させられるような写真がこの俺に撮れるかどうか、これは俺の挑戦なんだ」
「そうそう、そんな調子で口説かれたっけ。最初はふざけているのかと思ったけど、それにしては目の色が尋常じゃないのよね。キミはキミなりに真剣なんだなって思った。考えてみれば、写真に関してキミはいつでも真剣だったけど。だから……」
「引き受けてくれた。一昨日、終業式の前の日に。だからきみはここにいる」
「で？　ここまでやらせておいてやめるの？」
ここでブン殴られていた方が気は楽だったのだが、次に彼女が発した声には不安と、俺に対する気遣いがあった。
「理由を聞かせてもらえる権利があると思うんだけれど？」
……ああ、仰る通りで御座います。ごまかそうか、とも思った。下手に出て情けを乞おうか、とも思った。しかし、どちらを選択しても、それは彼女を侮辱することになるような気がした。

だから俺は、彼女にこう言った。
「昨日、最高のモデルを見つけた。彼女を知らなければ、きみの写真が最高だと確信できた。でも、俺は彼女を見つけちまったんだ。だから、モデルの話は忘れてくれ」

2

まあ、その後のことはあまり話したくない。俺は右の頬を腫れ上がらせて、額にこぶを作って家を出た、とだけ言っておこう。額のこぶはとりわけ痛かった。重い置時計を横殴りに叩き付けられたときには、マジで一瞬気が遠くなったものだ。
俺が彼女をこんなメにあわせてなんとも思わない人非人だとは思って欲しくない。良心の呵責ってやつはもちろん感じていた。それと同じくらい、自分がみじめだった。しかしそのふたつを合わせたものより強く、昨日、つまり終業式の日に出会った彼女のことを考えていた……

終業式の日、と言ったが、俺は終業式には出なかった。前の日の夜から始まったドカチンのバイトで朝までツルハシを振るっていた俺は、事務所のタコ部屋でおっさんたちと男同士水入らず、昼まで死んだように眠りこけていたのだ。
（写真、という趣味はカネがかかるものなのだ）
もちろんタコ部屋には、エアコンなんて気のきいたものはついていない。寝汗は気持ち悪くべとつき、ムシ風呂のような外気の中では渇くことがない。
意識をわざと半分眠らせたまま、駅前通りを家に向かってのたのたと歩いていた俺の前に……
彼女が現れた。
目に入ったのは、喫茶店に慌ただしく飛び込む後ろ姿。
真夏の太陽のぎらつく光の中に、ショートにした髪が輝きつつ広がる。その下にのぞくうなじのまぶしさ。たくましさと可憐さを同居させたふくらはぎが、オレンジ色のプリーツスカートをはね上げてコンクリのステップの上で踊り……喫茶店の中に消える。
その一瞬の幻影に酔った俺は多分、しばらく呆然と立ち尽くしていたのだろう。汗まみれの体がアスファルトの上で蒸発してしまう前に、生煮え状態の脳はなんとか体の制御を取り戻した。ふらふらと足を運び、彼女がその中に消えたドアを押し開ける。ウィンドウのステンシルには『COFFEE HOUSE OTIMTIM』とあった。
クーラーの冷気が肌をなでて外へ逃げていく。

「いらっしゃい」
　明度の違いに順応した目が捉えた店内には、彼女の姿はなかった。カウンターの向こうで、やけに筋肉質なマスターが皿を磨いているだけ。その時、声が聞こえた。
「ごめんなさい、遅れちゃって」
　彼女がいた！　左手でエプロンの後ろを押さえ、右手で前髪を整えながら、店の奥から現れたのは……
　意志の強さを現わす太めの眉がまず目に入った。続いて、頬から口元にかけてのライン……きつくもなくゆるくもなく、適度な緊張と柔軟性をもって、彼女の表情を自在に形作る。百ロール撮っても、彼女は1ショット毎にまったく違う表情を見せてくれるだろう。

　その表情が俺に向けられた。いたずらっぽく微笑んで。
「どうぞ？　こちらの席が空いてますよ」
　たっぷりと汗をかいたアイスコーヒーのコップが置かれたテーブルを前にして俺は、カウンターにもたれてマスターと話をしている彼女の後ろ姿をながめていた。
「式が長引いたのかい？」
「長引くようなたいしたものじゃないわよ。ちょっと、クラスでね……」
　太陽の下での強烈な印象が、なにによるものであったのか、Tシャツとミニに着替えた彼女を見るとはっきりとわかる。



上級生

俺は初めて、女性の肉体に『質量』……マス……を感じた。いや別に、彼女が太っていたというわけじゃない。どちらかと言えば、スレンダーな方だろう。にもかかわらず、ソックスに包まれたくるぶしからふくらはぎを経て、ミニの裾の中に消えるノーストッキングの大腿に至るラインには、はっきりとした個性があった。荒々しく削ぎ落とされ、芯だけになった生命の塊だった。ほら、ボディビルダーの筋肉が持つ『確固とした存在感の美しさ』、あれに近い。

あの質量を、存在感を、35ミリのフィルムの上に凝縮したい……砂漠の遭難者が水を想うがごとく、俺は渇望した。

彼女が振り向いた。俺は慌てて視線を転じて、アイスコーヒーに口をつけた。

ガムなしの茶色い液体が胃袋を焼いてはじめて、俺は昨日の夜から何も食っていないことを思い出した。スタンドに挟まれたメニューを手に取ってながめる。

気がつくと、彼女がテーブルの横に立っていた。見上げると、問いかけるように首を傾げてみせる。

「カレー、できます?」

「トーストかなにかにしておいたら? スクランブルエッグつけてあげるから。顔色悪いわよ○○クン」

「……なんで俺の名前を?」

「先負学園の生徒なら、写真部のあなたを知らない人なんていないんじゃない? ラグビーの試合中のグラウンドにカメラ抱えていきなり乱入してみたり」

「……迫力ある写真が撮りたかったんだ。邪魔するつもりはなかった」

「確か、あなたとぶつかった相手校の選手は骨折したんだっけねえ」

言っていることはきつかったが、目は笑っていた。

「廃工場の煙突の上に登った時も大騒ぎだったわねえ。新聞にも載っちゃったし」

「他人マネなんだけど。俯瞰の風景を自分も入れて撮るんだ。自分、ってやつを撮ったことがあまりなかったんで真似してみた。でも焼いてみたらさ……自分を魅せる、ってのはまた別のテクニックが……」

その時になってやっと俺は、彼女が着ていたのが先負のセーラー服だったことに気がついた。

「じゃあ、センパイなんだ?」

「あれ、そんなにふけて見えるかなあ?」

「違うの?」

「そうよ。3E。黒川さとみ」

3

それが、昨日のことだ。

家を出た俺の足は、自然『OTIMTIM』に向かっていた。

昨日と同じく、客はいなかった。今日はカウンターの向こうのマスターもいない。これで商売になっているのか激しく疑問だ。

「どうしたの?」

俺の前のカウンターにコップを置いた先輩が尋ねる。

「何が?」

「ここと、ここ」

自分の頬と額を指さしてみせる。

「ああ……」

「昨日はよれよれの遭難者みたいな格好で入ってきたと思ったら、今日は痴話喧嘩帰り? テンポの早い人生送ってるわね」

「フラれたばかりなんだ」

「ご愁傷様。敗因は?」

「ヌードのモデルになってくれって頼んだ」

「……救いようがないわね」

「いや、引き受けてくれたんだ。6月から口説いて口説いて口説き続けて、一昨日やっと承知してくれた」

「? 話が見えないんだけど?」

「今日、いまさっき、こっちから断ってきた。『きみじゃ最高の写真が撮れそうにない』って言って」

「おい」

先輩は本気で怒ったようだ。射るような眼差しで、俺の目をまっすぐにのぞきこんでいる。俺だって、だれか他人が彼女にそんなことをしたら、同じような目でそいつを見るだろう。殴るかもしれない。

「自分がどれだけ無茶をやっているか、わかっている?」

わかっている。わかっているんだ。そんなことは。

「俺は写真に関してだけは妥協したくないんだ」

「だったら最初から頼まなきゃいいでしょ！」

「頼んだときは、彼女が最高だと思ってた。でも、だめなんだ。彼女よりいい素材を……理想のモデルを見つけちまったんだから」

「あきれてものが言えないわ。そういう考え方がそもそ……も……」

　ああ、先輩の表情のなんと豊かなことか！　眉のラインを微妙に変化させるだけで周囲の空気は変化する。怒り、緊張、一瞬の弛緩、そして戸惑い。俺は心底残念に思った。こういう状況でなければ、この瞬間をフィルムに残すことができるのに……

　後から思えば。カメラマンの心得としてコンパクトカメラは常時持ち歩いているのだから、ここでカメラを取り出すなりして、お茶目なインターバルを置いておけば、それほど悲惨なことにはならなかったのではないか、という気もする。良かれ悪しかれ、その後の展開は大きく変わっていただろう。

　だか……俺は、先輩に魅せられていた。酔っていた。たとえその感情が好意的なものでなくとも、感情の交錯による陶酔感は味わえるのだ。俺は、無上の幸福感をもって一瞬一瞬の表情を網膜に焼き付けた。

「ちょっと……理想のモデルっていうのは、まさか？」

　俺の後ろでドアに取り付けられたベルが、からんと音を立てた。先輩の視線が俺からそれる。突然、言い様のない焦りを感じた。俺と先輩を隔てるカウンターの幅が、急に広がったように感じられた。俺は椅子を蹴って立ち上がり、カウンターの上に身を乗り出して先輩の二の腕を掴んだ。

「先輩！」

「こっこら、お客さんがっ」

「先輩が最高なんだ、俺に、先輩のすべてを見せてくれ！　俺は……俺なら、いや、俺だけが、生まれたままの先輩の素晴らしさを知っているんだ！」

「……えーと、ははは、すみません、奥が空いてます……どうぞ」

　先輩は俺を見ていない！

「お願いだ、先輩、脱いでくれ！」

　後ろで、慌てたような足音がして、ドアが閉まった。

　真っ赤な顔をした先輩は俺の腕を振りほどき、

「この……大馬鹿野郎！」

　右手に握られたごついタンブラーが額のこぶを襲った。十分に体重が乗っていることがよくわかる、シビアな一撃。

　タンブラーが砕ける音を聞いたような気がする。

　気がつくと、『OTIMTIM』のソファに寝かされていた。

　目だけ動かしてウィンドウの外を見ると……もうとっぷりと暗くなっていた。

　額に手を当ててみる。包帯の粗い感触があった。

「目がさめた？」

　ソファの背の向こうで、先輩の声がした。上体を起こして反対側をのぞき込むと、先輩が横になっていた。腕枕をして、まっすぐ天井を見つめている。

「……俺は……」

「たいしたことはなかったわよ。頭から血を吹いてぶっ倒れて、救急車呼んで止血して、脳波取って、痛み止め打って3針縫って無保険で清算して、タクシーで帰ってきただけ」

「……昨日のバイトの金があるけど、足りるかな？」

「言われるまでもなく使わせてもらったわ。ホントならわたしの精神的肉体的苦痛に対する賠償も請求したいところだけど？」

「お望みなだけどうぞ」

「……それだけ？」

　俺のわがままっていうのは、日頃はそれほど有害なものではないのだ。ただときどき、どうしようもなくひとを傷つける結果になってしまう。

　俺は立ち上がった。痛み止めのせいか、頭が少しふらつく。倒れそうになるのをこらえながら、腰を90度に折って最敬礼。

「すみませんでした」

　先輩の視線を痛いほど感じた。

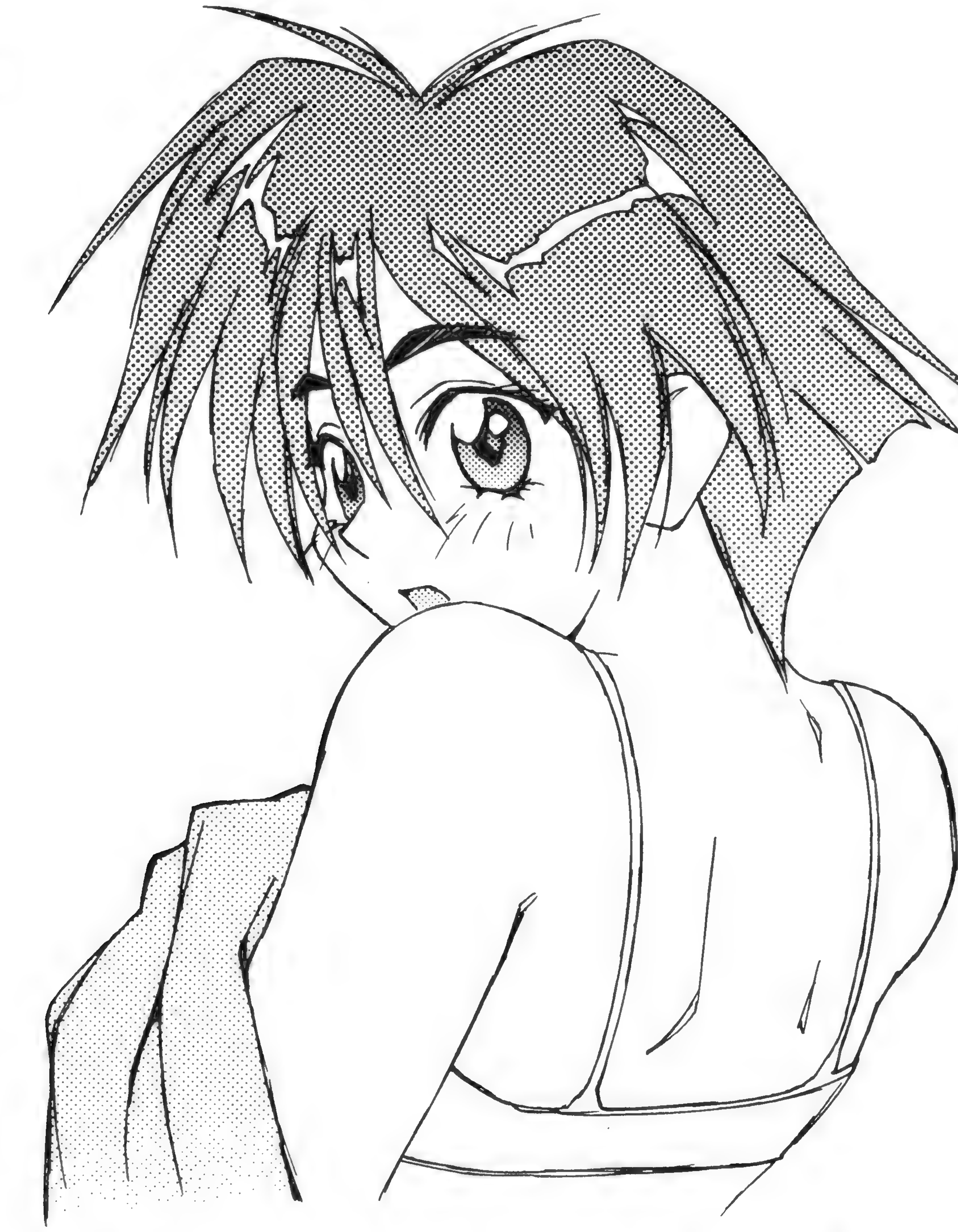
「もういいよ。怪我させたのはわたしなんだし。ごめんね」

　顔を上げると、ソファに座り直した先輩は、複雑な表情を湛えた横顔をこちらに見せていた。

「……なんか久しぶりだな、こういうゴタゴタって。

　知ってる？　わたしって、三年生やるの2回目なんだ。去年の二学期に、なんか微熱が続くなあ、と思って病院に行ったらいきなり検査入院。なんかね、溶原菌感染症の疑いがある、とか脅かされて。ベッドひとつの個室に閉じ込められて、一日二回採血されて……

上　級　生



まあ、痛かったり苦しかったりはしないんだけど、不安と退屈だけはどうしようもないわけ。そんなことやっているうちに二学期も終わっちゃって、冬休みも終わっちゃって……結局、なんでもないってことになって退院できたのが卒業式の前の日ってのが笑っちゃうと思わない？
当然、出席日数は全然足りなくて、留年ってことになったんだけど……やっぱり意識しちゃうのよね、クラスの中でも。他の子たちが共有している二年間の記憶がなんとなく壁に感じられて、それでいて『学園』っていう場は一年前とおんなじで。
なんか、リバイバル映画の製作を横で見ているだけの傍観者って気分。入院してた時の気分も引きずっちゃって、毎日毎日、同じことを繰り返しているようで、学園生活っていうのはもっと楽しくできるはずだ、って一年前の記憶にすがればすがるほど、今の自分との差を意識しちゃう……
だからさ、こんなわたしを撮っても面白くないよ。フラれた子と仲直りしてさ、元気で明るい彼女を撮ってあげなよ」
「俺が撮りたいのは先輩なんだ」
必死で感情を押さえながら言ったのだが、語調は強くなってしまった。先輩がびくっと肩を震わせる。愁いに満ちた表情が、怯えと戸惑いを加えてさらに深みを増す。
「俺は、愛想笑いを撮りたいわけじゃないんだ。苦しんで、悲しんで、その中に喜びがあって、安らぎがあって、また苦しんで、迷い続ける……そんな先輩のすべてを、この俺の手で凝結した像にしたい。永遠のものにしたい」
俺は目を閉じた。祈るような気持ちで、先輩の姿を思い浮かべる。
すると……ぞくぞくするような感覚とともに、まぶたの裏に次々とショットイメージが沸き上がってきた！
そう、この感覚が欲しかったんだ！
「俺が先輩を撮るとしたら……屋内より野外だな。先輩の体の雰囲気には、シーツやベッドよりも、芝生や土が似合う。時間は？　夜だ。静かな深夜。でも……」
微妙な違和感。俺の脳裏に、先輩を初めて見たときの印象が蘇った。
「光だ。ぎらつくような光、硬い光……シャープな光さえソフトにしてしまう、先輩の表情、肢体の持つ生命力……」
夜のイメージと、光のイメージ。これを両立させるには……
「公園だ」
「公園？」

先輩の声に、俺は思わず目を開けた。

先輩は、驚いたような、怯えたような顔でまっすぐこちらを見ていた。

「ああ、夜の公園。水銀灯の硬い光があって、遊具の原色、木々の緑……もちろん光量が足りないからそのままっていうわけにはいかないけど……あの『空気』を活かすことはできる。

そうだ、俺は生まれたままの先輩を、夜の公園で撮りたい」

4

俺は急いで家に引き返した。彼女がまだいたりしたらどうしよう、とも思ったが、さすがにそれはなかった。きちんとたたまれたシーツがベッドの上に置いてあるのを見たとき、胸にちくりときた。

しかし、肝心なのはこれからだ。まだ一日は終わっていない。俺は一番大きいカメラバッグに、必要なものをほうりこんでいった。まず、サープラスショップで買ってきた、大きめの軍用コート。冷蔵庫の中のストックフィルムをかきあつめ、ストロボはバッテリーパック込みで（これが重い！）予備も入れてふたつ。シンクロコード。入射光式露出計。ボディはふたつ。レンズが問題だ。アップ用に、中望遠を2本、明るさ優先でF1．2の50ミリを一本。念のためズームも1本。おっと、レリーズを忘れちゃいけない。

包帯の上から汗止めのバンダナを巻く。ストロボスタンドと三脚をスリングで束ねて、カメラバッグと一緒に肩にかけるとさすがに重い。額の縫合糸がきりきり鳴っているような気がする。夜の湿った熱気が体にこたえる。『OTIMTIM』に着く頃には、バンダナは汗でぐっしょりと濡れていた。

裏の通用口に回ってノブを回す。鍵がかかっていた。

スローテンポなノックをしながら、俺は肩を横の壁にあずけて目を閉じた。どっと疲れが出たような気がする。やっぱりいきなりっていうのはムリがあったか……

気配を感じた。

振り向くと、先輩が立っていた。

「あれ……」

家に帰って着替えてきたらしい。ざっくりとしたニット地の丸首に、男物のジャケットを羽織っている。柔らかそうなフレアからすらりと伸びた素足とのアンバランスさがなんともいえない。シャワーを浴びたのだろう、まだ湿った前髪の奥の瞳を見ると、また力が湧いてくるから不思議だ。

「じゃ、行こう」

俺は荷物を担ぎ直して、公園に向かって歩き出した。家に引き返す方向になるのが、精神的にちょっと辛い。少し遅れて、先輩がついてくる。

公園は、注文通りの冴えた光につつまれていた。入口をのぞけば周囲はぐるりと常緑樹にかこまれており、ちょうどいい目隠しになってくれている。

俺は三脚とストロボスタンドを立てて、機材を取り付けた。

今回の撮影の基本は、スローシンクロ。ストロボ撮影の場合、ただ普通に撮ったのでは、暗い背景のニュアンスを拾うことはできない。人物は写るが、背景は真っ暗、ということになるわけ。

俺のイメージのように、暗いけれど冷たい光、というニュアンスを取り込むためにはどうしたらいいのか？　理屈は簡単、シャッターをなるべく長く開けてあげればいい。人物を捉えるストロボ光は一瞬。シンクロさえすればシャッタースピードは関係ない。一方で、暗い背景は十分な露光時間を得ることができる、という、これがスローシンクロ。

モデルを待たせてはいけない。不安になる。先輩を芝生の上のベンチに座らせ、胸のあたりに露出計を当てる。横に立てたスタンドのストロボをたいて、結果をメモリー。これで人物の露出はOK。

「ストロボって、カメラについてるんじゃないの？」

「それだと、被写体は必ず正面からの光ってことになっちゃうだろ？　光源の位置は変えられる方が絵は切りやすいよね」

3歩下がってファインダーをのぞく。背景は水銀灯に淡く照らされた緑の木……難しいところだ。しかし、もうタイムリミット。

「先輩……」

「なに？」

「さとみって呼んでもさ、いいかな？」

「……うん」

「……じゃ、始めようか？」

「えっ？」

きょとん、とした顔をひとつ、ふたつ、シャッター速度を変えて、いただく。

「あの……脱がなくて、いいの？」

「大丈夫」
　ファインダーから顔を上げて彼女の目を見る。
「俺は俺を信じてる。さとみは俺を信じてくれ」
　まずは足。最初に俺を魅了したこの足を撮らないことには話にならない。ストロボとの角度を変える度に、脛に、ふくらはぎにできる陰が微妙な変化を見せてくれる……はず。
　一眼レフの場合、撮影者は、シャッターが下りた瞬間を目撃することができない。レンズを通った光をファインダーに導くミラーが跳ね上がり、切りとられた一瞬は、かわりにフィルムに焼き付けられる。
「くるぶしのあたりで足を交差させて。右に20度、回って」
「20度……ってなんで?」
「適当だ」
「あのねえ……」
「……そのまま膝をかかえて……ジャケットを脱いで。腕にかけて」
　芝生の上で、さとみの足はさまざまにその表情を変える。
「ところでさ……さとみは、シャツを脱ぐときどうやって脱ぐの?」
「え?」
「そのニットのやつさ」
　ちょっと戸惑ってから、さとみは頭の後ろに両手を回して、首からぬく仕草をしてみせた。
「OK、こっちからならいいかな?」
　俺はさとみの背中に回って、カメラを構えてみせた。
　さとみは肩ごしにこちらを見ていたが、やがて意を決したように、ニットの丸首をつかんで引き上げる。
　腕にシャツをからませたままでこちらをちらと振り向いたところでシャッターを切る。ねじれが生む背中の複雑な陰影を狙っていたのだが……
　さとみの目の表情にはっとさせられた。恥じらいでも、媚でもない、なにか、俺の知らない表情がそこにあった。
　その表情の変化は、次第に顕著になっていった。
「そこの……なんていうんだろうね、虫食い穴の開いたお椀を伏せたようなコンクリの……そう。登って腹ばいになって」
　胸の谷間を覗かせて、カメラに目線を送るさとみの表情は……なんというか、俺の想像を越えたものになっていた。悲しいようで、それでいて妙な光を帯びていて……俺は夢中でシャッターを押した。
　撮影を続けているうちに、俺はなにか息苦しくなってきた。
　常にアイコンタクトを保って相手の感情を誘導していくのは、かなりの精力を必要とする。ましてや、相手の感情が推し量れない領域に入り込んでいる今となっては……
　俺はインターバルを置くことにした。三脚をセッティングして、アングルを決める。
　一息ついて見やると、さとみは腹ばいのまま何かを待っているかのように身動きもしない。声に出さずに。胸の前で親指と人指し指をひねると、
　さとみは、少し胸を浮かせてフロントホックを外した。
　こぼれるように踊り出た乳房が、コンクリの上でひしゃげる。その光景は尋常じゃなくスリリングで。
　シャッターチャンスを外さずにレリーズを押すにはかなりの体力を必要とした。
　コンクリの築山から降りた彼女の腰から、フレアがはらりと落ちた。すかさず走りよって拾い上げ、他の衣類と一緒にカメラバッグに納める。そんな俺を、彼女はあの奇妙な迫力のある目でじっと見つめていた。
　俺はやっと気がついた。その視線の意味に。
　挑発、だ。何に対してかは知らないが、彼女は悲しみながら、なにかを、誰かを挑発している。
　俺を、ではない。であればもっと早く気がついていただろう。彼女の視線は、俺を越えてどこか遠くへ向けられていた。
「さとみ……」
　俺はさとみの手を取って、ブランコへ導いていった。座らせて、足を組ませる。初めて触れた彼女の大腿は、冷たい感触がした。
　気がつくと、彼女はスニーカーを履いたままだった。紐をといてそっと脱がせる。
　下がって、ストロボをセット。光は……光は、正面上方から。そしてカメラは左なめ後ろから。うなじから顔にかけての表情を狙うつもりだった。
「さとみ、手を鎖に……」
　つ……と、さとみの頬を涙が伝った。
　俺は……
　俺は。

俺はシャッターを押した。

足音が聞こえた。公園が面している通りのアスファルトを、硬いブーツが叩く音だ。

俺は素早く反応した。カメラバッグから軍用のコートを引きずり出し、さとみに羽織らせる。

三脚とストロボスタンドは、機材をとりつけたまままとめて担ぎ上げる。見落としたものは……

あった！　さとみのスニーカー！　カメラバッグにほうりこみ、肩にかける。さとみの手をひいて、俺は公園の裏へと駆け出した。

5

考えてみれば、さとみはソックスだけの裸足だったのだ。そう長くは走れない。警官らしい足音の主がこちらに気づいた様子もないので、公園から二百メートルほどいったところの路地に入って、俺とさとみは立ち止まった。

まだ心ここにあらずという感じのさとみの前にカメラバッグを置いて、俺は背を向けた。

「慌てて突っ込んだからしわになってるかもしれないけど……この中に全部入ってるから」

「……ここで」

「え？」

「ここで着替えるの？」



下着一枚にコートを羽織っただけの格好で歩き回るのも辛いだろうと思ったのだが、言われてみればここで着替えをするというのも恥ずかしいものなのかもしれない。

「ええと……」

幸い、俺の家までならここから歩いて3分ほどだ。

「じゃあ、俺の部屋で着替える？」

さとみは黙ってうなづいた。

ファンのスイッチを入れた。暗室に使うからけっこう強力なやつを取り付けてある。室内にこもっていた昼間の熱気が吸い出されていく。

長すぎるコートを腰のあたりでまとめてたくしあげて、ダークグリーンのすそから白い脛をのぞかせたさとみは、三和土(たたき)に立って俺の部屋を見回した。

「なんか……立派な部屋ね。一人暮らしなの？」

「いや、もともと、美大の兄貴が使っていたアトリエなんだ。母屋は隣にある。兄貴が結婚して出ていっちまったんで、俺がかわりに使ってるってわけ。今はアトリエっていうよりも暗室だけどね」

「ご両親は？」

「今は旅行中」

「ふうん」

さとみは三和土に立ったまま、部屋に上がろうとしない。

「なんだったら俺、母屋の方に行ってるけど？　それとも、母屋で着替える？」

「足が……」

「えっ？」

「さっき、怪我したみたい」

「ちょっと待って」

俺は慌てて、肩にかけていたカメラバッグを置いて、さとみの両手を取り、部屋に引き上げようとした。しかし、力を入れたとたん、さとみの体はあっけなく持ち上がり、勢いあまった俺はあおむけにひっくりかえってしまった。

俺の上には、ぶかぶかの軍用コートを羽織ったさとみがのしかかっている。なんとか体勢を立て直そうにも、余った布地のボリュームが大きすぎて、さとみの体を捉え切れない。

ごわごわの布地をかき回していた右手が突然、なめらかな感触にいきあたった。その手ごたえを頼りに左手を動かしていくと、やっとなんとか、さとみの腰を捉えることができた。その腰は頼りないほど細く、両手を回してしっかりと抱き締めていないと不安になり……小指のあたりに、さとみの下着のレース刺繍が感じられた。

するり、と差し出された腕が、俺の首にからみついた。と、思う間もなく、さとみの唇が俺の言葉を優しく封じる。

さとみの体がずり上がったため、腰を抱いていたはずの俺の両手は、さとみの臀部を包み込む形になった。

さとみが俺の首筋に唇を這わせはじめたときに、俺の中の何かに火がついた。はちきれんばかりになって丸い双丘を覆っている下着の中に、手を忍ばせる。そのまま外側へ手首を返すと、桃の皮をむくようにぺろりと下着がめくれた。あらわになった肌は、すいつくように柔らかく、濡れたように滑らかだった。

下へ下へと両手の指を進めていくと、臀部と大腿の境界に至る。弾力のある感触を楽しみつつ、内側へとたどる。

突然、指先が、熱い湯のような感触を捉えた。さとみは喉の奥で声をこもらせながら、まっすぐにのびた鼻梁を俺の鎖骨のあたりにこすりつけてくる。

ゆっくりと、その熱い湯を汲み出すように指をしゃくる。指の腹で、優しく、優しく、そこにあるのはさとみそのものだった。さとみの熱い火照りをいとおしむ。

あれほど邪魔だったコートの布地は、いまや重なりあったふたりの体を軽く覆うだけになっている。上になっているさとみは、腿のあたりに小さな下着をまとわりつかせているだけ。対して下の俺は、というと、これがほとんど撮影から帰ってきたときそのままの格好だったする。俺は、腕や首に触れる、さとみのなめらかな素肌の感触を楽しみながら、シャツを破り捨てて、さとみの感触を全身で感じたい衝動を必死で耐えていた。

さとみの声が細く、長く、泣き声に近い抑揚になってくるころには、さとみの蜜は大腿まで溢れ、俺のものはGパンの中で痛いほどになっていた。名残を惜しみながら、右手をさとみの股間から抜くと、ふやけた指先に外気が冷たく感じられる。

ぬめる右の指で、苦労しながら俺のものを覆う邪魔物をずり下げる。さとみの腰が押し付けられていたへそのあたりには、汗とは違う、暖かく湿った感触があった。

「さとみ……」

そっとうながすとさとみは、すすり泣きのような声を上げながらゆっくりと身を起こす。腰が美しくくねり、俺のものの先端を捉える。俺がゆっくりと腰を突き上げると、再び、さとみの上

体が降ってきた。

「はぁぁっ……」

俺のものはすっぽりと、さとみの中に飲み込まれた。

しばらくそのまま、俺はさとみの体内の熱さを味わっていた。

しかし、俺の肩にあごを置いたさとみが、細い声で訴える。

「お願い……早く、いかせて……」

体も精神も疲れきっているはずの俺なのだが、こういう類の一言には核爆弾級のエネルギーが込められている。俺は、存外たくましく張ったさとみの腰骨に手をかけ、腕と腰両方を使ってさとみの身体を揺さぶった。

「んっんっあっああっ」

最初、背筋の力だけでさとみの上体が跳ね上がり、慌てたように両腕が、俺のあばらの下端あたりにそえられる。無意識にコントロールの主導権を取り戻そうと、細い腕がはかい抵抗を試みるが、俺はそんなことはおかまいなしに、さとみの壷を自在に、早いピッチで突き上げ続けた。

さとみが切迫した息遣いでカウントダウンを始めるまで、それほど時間はかからなかった。

「だめっだめぇっ……んんんぅぅ……ああっ、もうぅぅっ」

最後に、ぎゅっと唇をかみしめ、ぶるぶるっと腰から下を震わせて……さとみは達した。

秋

そんなこんなで、俺の、高校二年の夏休み、第一日目は終わった。

俺は夏休みの間中、ほとんど暗室にこもりきりで、あの夜撮ったフィルムを現像し、ベタ焼きしてセレクトし、四切りに焼いてまたセレクトし、決心がついたところで引き伸ばしてパネルを作り、気に入らなくて壊し……ということを続けていた。

そんなこんなで、9月に入った時点で俺の手元にあったたのは……

・9ロール分のカラーネガ
・3ロール分のモノクロネガ
・全紙パネル3枚
・その他大小合わせてパネル7枚
・プリント無数。同じネガの焼付けバリエーション含む

だった。

さんざん迷った末、全紙パネルは結局、ニットを脱ぐさとみ、腹ばいになって挑発的にこちらをにらむさとみ、そして、ブランコの上で涙を流すさとみの、顔のアップ、という選択に落ち着いた。

で、今日は9月12日。学園祭初日。

俺は旧校舎の西階段、3階と4階の間の踊り場に、あぐらをかいて座っていた。ショート・ピースをくわえて火をつける。

ゲリラ展示は、ここでやるつもりだった。暗幕でぐるりと窓を覆って、天井のソケットから電源を取り、ハロゲンで照らしてやれば、ここも立派なギャラリーだ。

でも、やめた。

ネガも、パネルも、試しに焼いたプリントさえも、一切合切、さとみ……先輩のところに送ったのだ。厳重に梱包をして、昨日、先輩がいないときを見計らって『OTMTM』に預けてきた。

最後まで迷ったが、ある意味、俺はあの夜決心をつけていたのだと思う。

イケずにもんもんとする俺の上で、ひとりで達してしまった先輩が夢うつつに囁いた名前。

「たくろう……」

その名前は知っていた。もう卒業してしまったが、下半身でものを考えているような女好き、先負学園の有名人だった。

確信はないけれど、あの夜、先輩が『挑発』しようとしていた男は彼なのではないか、という推測は、そんなに無謀なものではないと思う。もしそうなら、あのときの先輩の表情を、存在感を引き出したのは、俺ではなく、『昔の男の記憶』だったということになる。そんなものを自分の作品として発表することに対して、俺は納得できなかった。

先輩は、俺を信じてくれなかったのだ。

だから、写真はすべて先輩に返した。

先輩はあの写真をどうしただろう。捨ててしまっただろうか、それとも……その『たくろう』って奴に送りつけてやる、という選択も、先輩だったらアリかもしれない。

ちなみに……あの一日の始まりに立ち会ってくれた『彼女』だが。めでたくもっとマシな男を見つけて、いまはそれなりに楽しくやっているようだ。よかったよかった。

どこか遠くの教室で、歓声があがった。煙草を上履きの底でもみ消し、握り込む。

ともあれ、学園祭という大イベントを、俺は逃してしまった。

次の夏までは、まだ遠い。


（了）


KURUMI
うむ…くるみちゃん
は えいねぇ…
適度にロリってて
適度にお嬢様で
ふふふ、…しかし…
実は よし子先生の
ファンなのだ(笑)
'95
Kon.
迷羊亭


TOMOMI
同2はX68版が
ないもので遊んで
ないでござるぅ…
メガネっ娘描いては
みたものの…どうも
キャライメージと違う
くさいぞ…と
しかも似てねーし(涙)
X68k版出すか
98note(カラー)を
めぐんでくだされ(笑)
TOSHINOBU KONDO
'95
Kon.


SAKURAKO SUGIMOTO
『桜子が死んだ!?』と
思いこんだワシは、
そのあと、海岸と神社を
いったりきたりして、他の女の子には目もくれず
ボーッとしてゲームを続けてしまいました……。
P.S. 生きててよかった!!


中美沙です.
念のため。
1995.


MINORI
KATOH
とかいうひと。
1995.


1995
似てませーん
スイマセーン
誰だか、ホントに


同級生2.
98持って無いんで、Hゲームは
ほとんど、やった事無いん
ですよ その内買ったら
サルのように ゲームやりたい
なー！でも――いつの
事に。
なるやら…。
1995.7.


I-2
いや〜
同級生2.大変でしたね。
1作目の時はライトなノリ
でしたが
やり始めて十数時間、
どうもこいつは違うで…と
思った時にはもう遅い。
バッドエンディング
三連チャンを
引きあててしまい
ました。
もともとインサイド
しやすい私は、
そのまま
3日くらいショックで
立ち直れませんでしたよ。
それからは綿密なスケジューラー
と化し、知人のマンガ
家氏たちに教えを
乞い、
クリアを目指し
ました。
Hiroyuki
Hataike.
95.8.


やり込むほどに、なんというダイアローグの上手さ、という部分でしょう。
ハマるのは 竹井氏の洗練された絵とあいまって
絶妙の世界観となっています。
作品という事でこんなに感動したのは久々でした。
という事で企画されたこのD-2コンポジット。
スタッフの方々への感謝の気持ちを込めて送ります!!!

said that spending on and private building ts declined by 0.3 per- March, following even bsidiaries to raise cash. in public construction, fell to an annual rate of

damages, bringing the total to just under $12 billion.

WASHINGTON (AP) U.S. construction spending, hit by a of setbacks since five months of declines from February through June of 1981, right be said Monday.

The Commerce Department said that spending on public and private building projects declined by 0.3 percent in March, following even sell subsidiaries to raise cash. plunge in public construction,

damages, bringing the total to just under $12 billion.

WASHINGTON (AP) U.S. construction spending, hit by a of setbacks since five months of declines from February through June of 1981, right be

stant film and cameras — and booted Kodak out of the instant photography business, saddling it with $600 million of losses and an estimated $200 million worth of useless manufacturing equipment. fore the start of the 1981-82 said Monday.

stant film and cameras — and booted Kodak out of the instant photography business, saddling it with $600 million of losses and an estimated $200 million worth of useless manufacturing equipment.

freetalk

どうも、竹井です。

今回、幡池氏に誘われて、このページを担当しました。

ふっふっふ…… 次回は幡池さん、私の方にも描いてネ。



has underwritt dies to support In a previou ruled in Oct Kodak had vi Polaroid's ke of fats and oi ucts in the las only 550 milli million kg), or tropical oils. Michael Su economist and construction n that history co about 650 milli million kg) a y the record 1.6 (720 million k 1970s. The three c clines pushed a a seasonally a rate of $413.5 b "quality assur fruits and vege ers willing t creased testing pesticide resid Tropical oil adverse healt the Malaysi Growers Coun an informatio has underwritt dies to support In a previou ruled in Oct Kodak had vi Polaroid's ke of fats and oi ucts in the las only 550 milli million kg), or tropical oils. Michael Su economist and construction n that history co about 650 milli million kg) a y the record 1.6 (720 million k 1970s. The three c clines pushed a a seasonally a rate of $413.5 b "quality assur fruits and vege ers willing t creased testing pesticide resid Tropical oil adverse healt the Malaysi Growers Coun an informatio has underwritt dies to support In a previou ruled in Oct Kodak had vi Polaroid's key of fats and oil ucts in the las only 550 milli million kg), or tropical oils. Michael Su economist and construction n that history co about 650 milli million kg) a y the record 1.6 (720 million k 1970s. The three c clines pushed a a seasonally a rate of $413.5 b "quality assur fruits and vege the Malaysia Growers Counci an information has underwritt

vestments it needs to compete with Japanese film makers. disease," citing last year's report by the U.S. surgeon general recommending reduced intake of dietary fats, especially saturated fats. stant film and cameras — and booted Kodak out of the instant photography business, saddling it with $600 million of losses and an estimated $200 million worth of useless manufacturing equipment.

In addition, Schwartz argued that Polaroid is entitled to interest and triple punitive damages, bringing the total to just under $12 billion.

WASHINGTON (AP) U.S. construction spending, hit by a of setbacks since five months of declines from February through June of 1981, right before the start of the 1981-82 said Monday.

The Commerce Department said that spending on public and private building

with Japanese film makers. disease," citing last year's report by the U.S. surgeon general recommending reduced intake of dietary fats, especially saturated fats. stant film and cameras — and booted Kodak out of the instant photography business, saddling it with $600 million of losses and an estimated $200 million worth of useless manufacturing equipment.

In addition, Schwartz argued that Polaroid is entitled to interest and triple punitive damages, bringing the total to just under $12 billion.

WASHINGTON (AP) U.S. construction spending, hit by a of setbacks since five months of declines from February

Commerce Department said that spending on and private building declined by 0.3 per- March, following even sidiaries to raise cash. n public construction, ll to an annual rate of ts it needs to compete

Polaroid's key patents on in-

The Commerce Department said that spending on public and private building projects declined by 0.3 percent in March, following even sell subsidiaries to raise cash.

plunge in public construction, which fell to an annual rate of vestments it needs to compete with Japanese film makers. disease," citing last year's report by the U.S. surgeon general recommending reduced intake of dietary fats, especially saturated fats. stant film and cameras — and booted Kodak out of the instant photography business, saddling it with $600 million of losses and an estimated $200 million worth of useless manufacturing equipment.

In addition, Schwartz argued that Polaroid is entitled to interest and triple punitive damages, bringing the total to just under $12 billion.

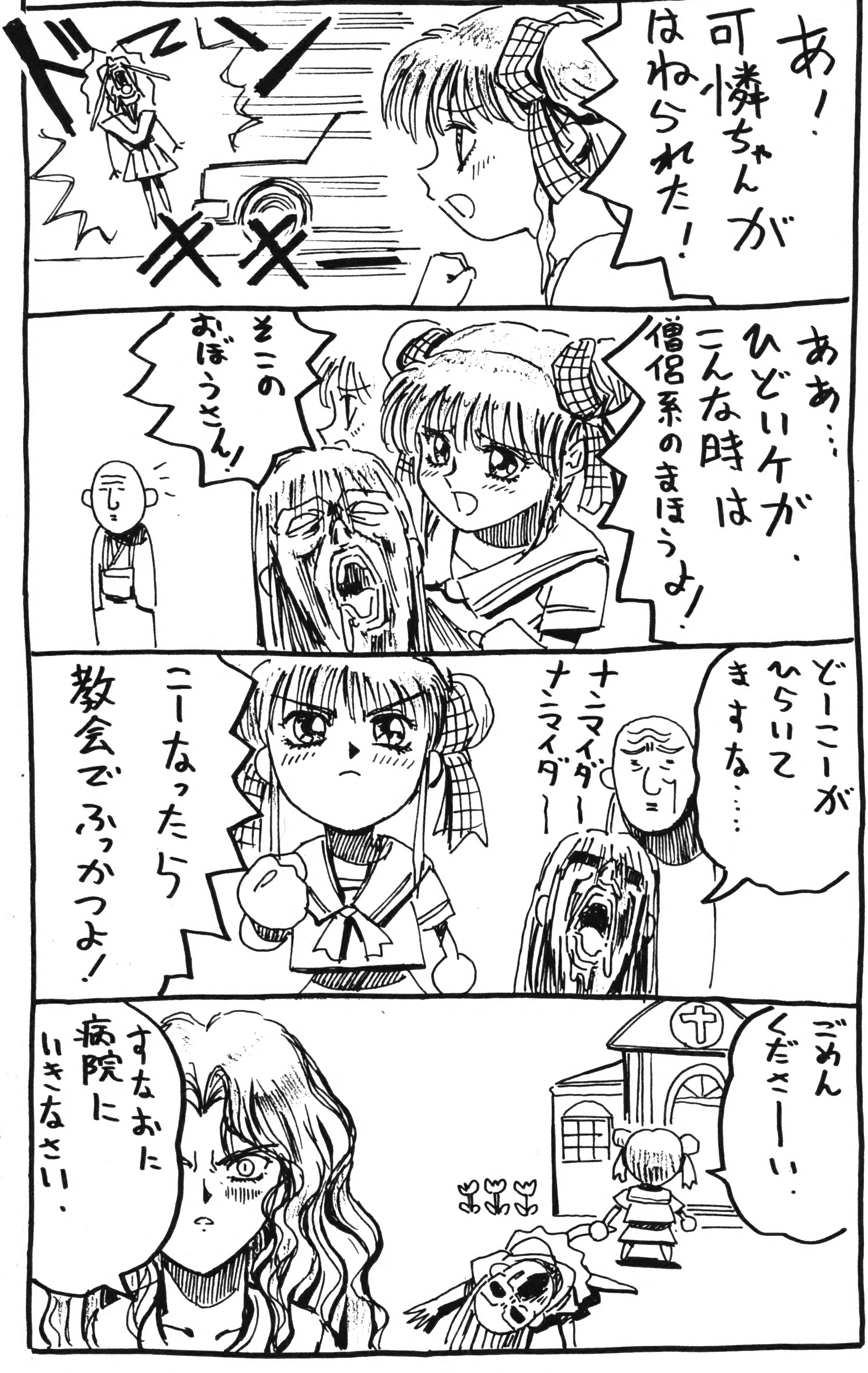




1995.8.5

唯ちゃん ゴーゴー

作 でっち



D-2

同級生2

Dogsei 2 composite



編集長

幡池裕行

編集

まっしい

レイアウト／デザイン

シイバミツヲ

進行

松本富之

ブラックポイント２号

伊東岳彦

ゲスト

あかほりさとる＆奥谷かひろ

明日香景介

うしだゆうじ

大屋　舞

Ｋ２（山さん）

こいでたく

小山雲鶴

近藤敏信

しらとりれいこ

菅沼拓三

鈴木雅久

せたのりやす

そえたかずひろ

竹井正樹

武半慎吾

土屋杏子

中沢数宣

西島克彦

幡池裕行

ビトウゴウ

富士参號

まると！

美樹本晴彦

森下　薫

林堂　昇

横田　守

（敬称略　５０音順）

DOQSEI-2　COMPOSITE　（D-2　コンポジット）

発行　あ…（丸美屋本舗）

発行日　1995年8月19日

印刷　（株）共信印刷

御意見・御感想等は、下記あて先へお願いします。

連絡先　〒140　品川区八潮5-4-17-808

中山　克典

COMPOSITE

DO Q

STAFF

Hiroyuki Hataike

Massy

Mitsuo Shiiba

Tomiyuki Matsumoto

Brack Point #2

Takehiko Ito



THANKS to

BitouGou

Fuji 3gou

Haruhiko Mikimoto

Hiroyuki Hataike

K2(Yama-SAN)

Kaoru Morishita

Katsuhiko Nishijima

Kazuhiro Soeta

Kazunori Nakazawa

Keisuke Asuka

Kyouko Tsuthiya

Mai Ohya

Mamoru Yokota

Maruto!

Masaki Takei

Masahisa Suzuki

Noboru Rindoh

Noriyasu Seta

Reiko Shiratori

Satoru Akahori &Kahiro Okuya

Shingo Takeba

Taku Koide

Takuzou Suganuma

Toshinobu Kondoh

Unkaku Koyama

Yuuji Ushida

SE I

DOOSEI 2

MARUMIYA